

私の抗日戦争

日本軍の通訳から、
八路軍の兵士、朝鮮義勇軍へ

柳 東 浩

むくげの会では、去る九月一日より一六日まで、中国延辺より朝鮮族の元抗日運動家の柳東浩氏を招待した（15日間のビザで16日滞在できるのをご存知ですか？）。柳東浩氏とむくげの会とは、九年前に『季刊三千里』に載ったむくげの会の記事が契機となって、交流が始まり、これまで何度か招聘していたが、今回やっと訪日を実現したものである。その後、佐久間英明と飛田雄一が延辺を訪ねて直接お目にかかるという機会もあった。柳東浩さんについては、最初の訪日予定のときに出した『むくげ通信』一一三号（89年3月号）に「ある中国・朝鮮族の歩み——柳東浩さんの場合」（鹿嶋節子）がある。柳氏は、神戸の他、友人のお世話により、福島、東京等にも旅行することができた。この間、いくつかの新聞社の他、『季刊青丘』の姜在彦氏、李進熙氏よりインタビューを受けた。『季刊青丘』の次々号にその内容が掲載される予定である。神戸では、九月一二日に神戸学生青年センター主催による特別講演会が開かれ「私の抗日戦争」と題して、二時間半お話しされた。自分の日本軍の通訳時代のことも含めて、氏は流暢な日本語で、淡々とかつ率直にユーモアをまじえて話された。むくげの会ではいづれ、柳氏自身が朝鮮語で書かれた文章も合せて「自叙伝」として出版したいと考えている。今回は紙数の関係でそのエッセンスということになる。またむくげの会では、87年12月に大村益夫氏の翻訳による『中国の朝鮮族』を自費出版しているが、延辺朝鮮族自治州についてはそれを参照していただきたい。

●開城で生まれて新義州へ

むくげの会に招いていただいて、初めて日本にやってきました。後で申し上げますが、これまで二度、日本に来るチャンスがあったのですが果せなくて、初めて来ることができました。

私は、一九二一年九月一七日、開城に生まれました。当時は開城府といっていました。開城は、むかし高麗の首都でした。李氏朝鮮をつくった李成桂が、高麗王朝に任えていた鄭夢周を殺したところです。その血が、消えないというところがありますが、それが善竹橋というところ

です。開城は、保守的なところがあつて、新しい李王朝に任えることはせずに商売に徹したとも言われています。開城の簿記も有名ですね。保守的だというのがまた、日本帝国主義にも抵抗する姿勢にも繋がったようです。

私の祖父は、開城のこのような雰囲気とは少し違って、キリスト教の伝道師をしていました。当時としては「開化」的な祖父でした。当時、一般の朝鮮人は二、三年書堂にいった漢文を習い、それから普通学校に行くものでしたが、祖父は私を最初から普通学校に入れました。

日本語を習わないかん、ということでした。

そして私は九才のときに、朝鮮の西北の端にある新義州に移りました。朝鮮では男子が大切にされますが、祖父も父も、そして私も男兄弟はおらず、男はひとりでした。とても大切にされ、親によく任えなければならぬのですが、私の父は、一三才のとき家を飛びだし靴屋の見習いになったのです。そして職工組合に参加し、それから北間島、いまの延辺にいった、試験を受けソ連に留学しようとしたが、学問がないということで行けなかったそうです。それで仕方



なく開城に帰ってきましたが、祖父との生活もきまらなかったようで、新義州に移ったのです。私は、最初、祖父と開城にいましたが、父がきちんと送金をしていたらよかったです。けれども充分にできてなかったようです。祖父も私を育てることが難しいということになり、ひとり息子の私を新義州に移すことになったのです。それが九才のときだったのです。

●運動会のサルマタ

新義州での生活は、とても貧乏でした。運動会ときには、みんなサルマタを着て走るんですが、そのサルマタが買えなかったのです。父に買ってほしいと頼むのですが、お金がないのです。一五錢ぐらいでしたが、そうしたら祖母がためていたお金で買ってくれたのです。当時朝鮮では、家の中に便所がなくて、夜の間にヨーガン（オマル）にためておいて、朝になって外に捨てるのです。道などはとても汚なかつたのですが、開城では他の都市と違ってました。開城カクチェンイ（けち）と言われますが、開城ではそれを缶にためておいて売ります。一缶が二錢です。祖母はそのお金をためていてそれでサルマタを買ってくれました。それで運動会に参加できたんです。

その後、父の仕事の関係で義州に移り、そこで普通学校を卒業しました。当時、私は中学校に行けるような家庭の経済状態ではなかったのですが、私が中学校に行けたのは、父が学問が

なくてモスクワへも行けなかったことを後悔していたということが大きく関係しています。わが家には代々学問をしたものがないので、前だけは学問をしる、ということでも中学校に行くことになったのです。普通の家では、子どもが中学校にいきたいといっても、親がお金がないからだめだと言ったりするんですが、私の家では反対だったんです。わたしは、普通学校では成績は良かった方なんです。

当時、商業学校を受験する人は日本人は百人ぐらいです。そこで二五人がうかるのです。朝鮮人は五百人ほど受験し同じく二五人が通るのです。平等でないといえば平等でないけれど、当時の事情がそうなんです。なぜかというと、当時朝鮮人で大学にゆく人はとても少ないんです。中学校で終えるから普通の中学校に行くよりは商業学校を出た方が、就職に有利なんです。ですから優秀な朝鮮人が商業学校に集まってくるんです。日本人はみんな親が偉い人ですから、金もあるんです。その息子たちはみな大学へ行きたがります。だから商業学校に行かずに普通の中学校にいくんです。ただ日本人の中でちょっと貧乏な家庭のひとや成績の悪い人が商業学校にくるんです。ですが一学年を日本人二五名、朝鮮人二五名ということにしていますから、朝鮮人の方が優秀なのが多かったのです。新義州では朝鮮人で合格したのは、ぼく一人でした。父は辛いことがあっても中学校は卒業させたい

という考えだったのです。

●幻の日本修学旅行

実際に学校に入ったら、毎月学費が三円五〇銭、修学旅行の積立金が一円でした。初めの何ヶ月間は払いましたが、お金がないので学費分だけ払うようになり、その後は、積立金分を返してもらって学費を払ったりして勉強しました。修学旅行は日本で、それが私の日本に行く最初のチャンスでしたが、お金が無くて行けませんでした。

それが、卒業するときになると、朝鮮人は就職が難しいんです。当時一番いいのは、殖産銀行でした。みんなそこへ行きたがるんですが、私たちの学校の朝鮮人はいけないんです。日本人の学生がいけるんです。卒業のとき、成績の上位一〇名はほとんど朝鮮人なんです。一位でも採用されないんです。銀行の言い分は、優秀なものを順に採用すれば、殖産銀行が朝鮮人ばかりになってしまおうと言うんです。だから、少し成績が悪くても日朝共学の商業学校からは日本人を採用し、朝鮮人だけの商業学校から朝鮮人を採用するのだということです。そんなわけで朝鮮人は金融組合で働くことが多かったのです。父は私に大きな期待をかけているのですが、私はだんだん勉強しても朝鮮人はダメだ、と思うようになりました。

また当時、一九三六年頃は、立派な人の経歴を見ると大学出の人ばかりなんです。私が考

えるに、勉強しないでも出世しているのは、小説家だったんです。学校の勉強をあまりせず、小説ばかり読んでいた影響もあるのでしょうか、私も、小説家になつたら出世できるかもしれないと思うようになりました。

●「朝鮮のゴリキ」

学校では、朝鮮人は朝鮮人の新聞を、雑誌を、小説を読まなくてはいけない、日本語を話してはいけないと中学生が宣伝して、私もそのような運動をしていたのです。私は、そんなことをしながら日本の小説ばかり読んでいました。が、一級上の学生に、日本のプロレタリア文学を一生懸命読んでいる学生がいました。唯物論とか、マルクス主義の本も読んでいましたが、彼は、日本帝国主義に罪はあるが日本語に罪はない、と言うんです。わたしは、なるほど道理があると思いました。その彼の影響を受けたというのがあります。いまでも、延辺で日本語を話す人に会つたら日本語で話したりしますが、そのときから、日本語には罪はないと思うようになりました。久米正雄の『一直線』、それに『少年倶楽部』、『キング』いろいろ読みました。お金が無くて友達から借りたり、貸本屋で借りたりしてよ読みました。今のわたしに悪影響を及ぼしているかもしれません、『膨張の日本』、『英雄待望論』、また『自由の旅』などをさんさん読みました。そして、ゴリキの『どん底』とか『私の少年時代』とか『わが

大学』とかを読んで、ぼくの行くべき道はゴリキの行ったあの道しかない、ぼくも流浪して一〇年、二〇年たてば、朝鮮の社会を、底辺の生活を、底辺の視点から書けるんじゃないかと考えたんです。それが、世の中を変えるのに力にもなるんじゃないか、そして私も有名になるんじゃないかなどと考えたんです。夜は、野球場で寝たりもしました。なぜかわかりますか、放浪生活の練習です。

そういう目的で私は、新義州から瀋陽、当時の奉天までの旅費だけをもって旅にでました。瀋陽から山海関、そこから歩いて秦皇島、また列車で北京へそして天津の租界に行きました。駅で寝たり、列車の修理場のたき火に一晚中あたっていたりすることもありました。そんなことをして、仕事にありつくこともあったんですが、『自由論』を実践していましたから、やりたくないことを我慢してやるのは奴隷だ、自由があつてはじめて人間の生命がある、自由なき人生は屍である、などといって仕事を何回かやめたんです。

●「憲兵隊通訳募集」

当時朝鮮人が職を探すのは難しかったんです。「店員有用」とあつても、「ただし内地人に限る」とあるんです。また、保証人もいないし大変だったんです。にっちもさっちもいかなかったんです。あるとき憲兵隊の前を歩いていたら、「通訳募集」の張り紙があつたんで

す。これには「内地人に限る」がなかったのです。通訳にもいろいろあつて、日本の外国語学校を卒業したような人は通訳官というんです。現地で採用する通訳にも二種類あつて雇員は偉い方で、傭員は下っぱの方で、私は傭員でした。通訳試験もおもしろいんですが、当時私の中国語は通じないです。しかし、紙に書くのはできました。口頭試験も簡単なもので無事通りました。そしてたら、前線にいくか、と言うんです。みんな通訳はしても前線には行きたくないと言つたんですが、わたしは、はい行きます、と言つたんです。なにも私が勇敢でそう言つたんではありません。

あの当時火野葦平さんが書いた『麦と兵隊』が非常に売れていたんです。それで私も前線に行つて、見たり聞いたりしたことを書いたら火野葦平さんのようになれるんじゃないか、などと思つて前線にいったんです。わたしが想像した前線というのは武漢三鎮の所かと思つていたんですが、天津から約五〇中国里(20*)離れた滄県というところです。前線じゃないと思つたんですが、そこにも抗日のパルチザンが入つてきていて戦闘があるからまさに前線だったんです。その日の晩、すぐに討伐隊に行けというんです。おどおどしながらいきました。夜明け近くになって、急に、通訳前へ、と言うんです。私は前にいきました。中国人の百姓を捕まえて、道を聞くんです。通訳をしました。それが地

方なまりがきつくて、通じないんです。本で習ったのとは違うんです。月を月亮ユエリャンというんですが、そこではエーメンダールというんです。聞いたこともないし何をいつているのか分らないのです。偽の通訳が来た、といって憲兵が怒るんです。どうなるかとひやひやでした。

憲兵が捕まえてきた八路軍の捕虜を日本刀の柄でたたいて、血を流させるといふようなこともありましたが、もうひとり台湾人の通訳がいたんですが、その人は、もうやりきれません帰らしてください、と言ったんです。そしたら憲兵が、帰してやるというながら、皮のベルトで半殺しにするんです。それを私に見せるのです。

おまえもやりたくないというんならこのザマだぞ、ということを見せるんです。台湾人はその翌日帰っていきましたが、それを見た私は、以前は、私は自由人だ、やりたくなかったらやめる、といっていたのが、それどころじゃないんです。自由を唱えたらあのようにやられると考えたとしても恐ろしかったんです。

またあるときは、捕まえてきた八路軍の捕虜を梯子に縛って拷問するんです。そして、通訳水もつてこい、というんです。水を無理やり飲ませる水拷問をするんですが、水もつていくのも怖かったんですが仕方がないんです。私は通訳というのは机の上で翻訳等をすると思っていて、天津で『日華コンサイス』を買ってもってきたりしていたんです。

●幸運な負傷

翌日、部隊が三〇里(12キ)ほど移動することになったんですが、軍隊の方に通訳がいらないんです。憲兵隊から通訳を出してくれませんか、ということになって、私が移動する部隊の先頭の車に乗ったんです。道案内させる中国人の通訳をするんですが、とても大事なことです。もし間違えば、皇軍を変なところに案内したとして、その中国人は殺されますし、また通訳である私の責任なのです。実力のある通訳なら、ドアの外 Тайヤ の上の部分に立たせた中国人が、右だ左だなどというのをそのまま通訳していればいいんですが、中国語のよく分らない私は、その中国人の横と一緒にトラックにぶら下がって、通訳したのです。さほど行かない間に狭い道で、左右に壁があるところにさしかかったのです。運転手が下手だったのか、中国人は Тайヤ の上だったので無事通過したんですが、一番端にぶら下がっていた私は、壁とぶつかって膝の部分をやられたんです。荷物を止めるためにトラックの端の部分についている曲った金具が膝の裏にくい込んだんです。

負傷したんですが、私は通訳しなくなかったのが喜んだんです。車の荷台に乗せられ中隊の治療するところまで運ばれました。ところが、衛生兵が、骨がやられているらしいからここでは治療できません、というんです。それで、夜になって大隊に護送されました。大隊の衛生兵

は、ここでも無理です、野戦病院に送らなければいけません、というんです。私は、どこまでも送ってほしい、通訳しなくてすむということがとてもうれしかったのです。でも、野戦病院にも手術の設備がないんです。そして、これは陸軍病院に送らないといけないということになって、列車に乗って天津の陸軍病院に行きました。そこで治療していましたが、そのとき大洪水にあつて、疎開することになったのです。私の病棟では、日本に疎開することになって、私は中学校時代に修学旅行で行けなかった日本に行けると思つて喜んだんですが、だめだったんです。日本の陸軍病院では治療が終わると家に帰らせるんですが、朝鮮人は日本から朝鮮に送らなければならなくなるからだめだというんです。これが二度目の日本行きのチャンスでしたが、だめになってしまいました。

その後、北京の陸軍病院、いま清華大学のあるところに移されて治療しました。外からみると骨が痛んでいるように見えていたんですが、骨は痛んでなくて、わりと早く直ったのです。入院中に魯迅の『阿Q正伝』を日本語で読んだりもしました。その当時、例えば退院したくない人が、検査の日に朝から一生懸命走り、わざと心臓をドキドキさせて退院を延ばしたりしていたんです。私は八カ月ぐらいブラブラしたので、あまりウソもつけないで退院し部隊に戻ることにしたんです。当然、そのとき逃げれば

よかったです。それが、もしも将来なんかさ
れたら困るなどと思って、まじめにひとり部
隊を探していったんです。そしたら状況は少
違っていました。

● 八路軍の捕虜に

二人の憲兵、二人の通訳という体制になって、
憲兵と通訳ひとりずつが親しくなって、以前の
ように殴られるということもなくなりました。そ
れで安心したんですが、その安心が悪いんです。
憲兵が中国人を叩くとき、むかしは怖くて何も
いえなかったのに、今度は自分も、ウソだろ！
とか大声でいったり、いっしょに竹刀で叩いた
り悪いことをするようにまりました。それが私
の通訳時代の罪悪です。加担すべきではないこ
とをやりました。

黒龍村というところに移って半年ほどいまし
たが、年の暮の賑やかな市の日に鈴木という憲
兵と中国人と私の三名が出かけました。市場の
見物が終わって市場を出たときに、私は突然後
からはがいにめをするようにつかまれました。

八路軍のバルチザンです。横にいた憲兵は逃げ
出しましたが、ピストルを二発撃たれてその場
に倒れました。中国人はすでに危険を察知して
いたのか、そこにはいませんでした。私は拳銃
がないので手留弾を出そうとしましたが、取り
上げられなくなりました。連れていかれるとき
に憲兵を見ましたが、すでに死んでいました。

そのころ僕は、八路軍を土匪だと思っていた

んです。こいつらは飯が食えなくてブラブラし
ているんだ、だからこいつらを説得して日本軍
のところ連れていくんだなどと考えていたん
です。私が話をつけようとしたら、こいつは日
本に完全に洗脳されてるというんで、説得なん
てとてもできないと思ってそれをあきらめまし
た。その夜には大きい部隊に移され、その翌日
には引出されて訊問を受けましたが、私は言う
ことは聞かないという生意気な態度でした。八
路軍は日本軍に根拠地を分らないようにする
ために毎晩、行軍するんですが、そのときは両
手に首までくられた状態でした。くくられる
ときの八路軍兵士の言葉が忘れられませんが、
高麗坊子——朝鮮人を蔑んでいる言葉ですが——
のくせに日本人の手先になった、ひどいめにあ
わせないかというんです。私は日本人の手先
になったというのはそのとおりだと思いました。
朝鮮人として日本人の手先になったのが間違っ
たことであることはわかりました。だからと言
って私は、許して下さいといっただけ膝をついてあ
やまるというのではなくて、勝手にしろ、殺す
なら殺せ、という態度でした。

その晩も行軍が終わってから倉庫のようなと
ころに寝かされました。その翌日、幹部が私を
よんで、八路軍は捕虜を優遇するとか、いろん
なことを説明しました。でも私は、しばって行
軍させておきながら、そんな捕虜を優遇するな
んてウソだ、という態度でした。しかしその後、

実際に優遇をしてくれました。いまでも、中国共
産党の捕虜に対する態度は徹底しています。私
は、今回の訪日でほんとに久しぶりに東京の代
々木病院の佐藤武雄さんに会いましたが、あの
方も捕虜となって、後に、抗日運動に参加され
た方ですが、佐藤さんも優遇されたといってい
ました。東大出身のお医者さんで、その後、太
行山で野戦病院の医者になり、延安に行き、一
九四三年三月の中国共産党第七回代表大会に参
加し、終戦後、野坂参三といっしょに飛行機で
朝鮮にいつて平壤で金日成にも会った人です。
他にも捕虜になって優遇された体験のある日本
の兵士もたくさんいます。最初は、こんなもの
食えるか、などと大きな声だしても八路軍は怒
らないんです。がまんして少し食べなさいよ、
というような態度なのです。いまあなたがたは
八路軍が分からないのですよ、しんぼうして勉
強しなさい、という具合です。

私も初めはとても反抗的な態度だったんです
が、変っていききました。初め、「敵軍工作」の
部長していた日本大学を卒業したという八路軍
兵士とよく筆談をしました。その部長はコウリ
ヤンでつくったマンジュウを、具のほとんど入
っていない汁につけて食べるんです。なのに私
は「優遇」ということで白いマンジュウとおか
ずを食べさせてくれるんです。あるとき私は、
これからあなたと同じもの食べる、と言ったん
です。そしたら、この男は進歩した、革命的に

進歩した、というのです。いやそうじゃないです、すまないと思って言っただけですと言ったんです。

私はずっと綿入れのようなものを着ていたんですが、三月末ぐらいになって、八路軍兵士に新しい軍服が配られたんです。日本軍のものとは比べれば立派なものではないんですが、私は、私にそれを着させて下さい、といったんです。そしたら、これが二回目ですが、進歩したとほめられました。

●八路軍の大集会

またあるときは私は、聞いたんです。私は日本帝国主義をやつつけるのは反対しない、でもアメリカもイギリスも中国を侵略しているではないか、なぜ英米の帝国主義とは仲良くしながら日本とばかり闘っているんですか。これは当時日本帝国主義が宣伝していたのの受け売りですが、私の疑問でもありました。そしたら彼は、いい質問だ、と言うんです。われわれは、帝国主義にはみな反対だ、いま日本帝国主義と闘うのに汲々としているのに一度にみんなと闘ったからなんの目的も達せられないのではないか、だからまずわれわれを一番脅かす日本帝国主義を中国から追い出して、追い出した翌日からアメリカかイギリス、そのときの状況によってひとつひとつやっていくんだというんです。私は、八路軍にはきちっとした理論があるんだなと思って感心しました。

そして私の考え方にもっとも大きな影響を与えたのはその年、一九四〇年五月のメーデーのときのことです。山東へ移ってからのことですが、メーデー大会に多くの八路軍兵士がやってきました。それまでは毎晩毎晩、行軍をしていました。こんなに沢山の八路軍の兵士がいるのかとびっくりしました。当時、山東地方の七つの県に日本軍が入ってなかったのです。昼間に何千名の人々が会議をするんです。スローガンを叫んだりもするんですが、私はそれがとても羨ましかったんです。私も朝鮮に行つてこんなことができればどんなにいいだろうと。それからその晩、演劇をするんです。簡単なあらすじの演劇だったんですが、それをいつもいっしょにいる宣伝隊の人がするんです。本当に感動しました。

その年の秋、延安から敵軍工作隊がきました。当時、抗日軍政大学の卒業生の中からよりすぐったもので、彼らに日本語を教えて、それぞれの前線に行かせるのです。その最後のグループが山東にきました。彼らがそのとき延安から持ってきた本の中に小林多喜二の『蟹工船』などもありました。その部隊の中にひとり李明^{リミ}という朝鮮人がいました。はじめて私は朝鮮人の革命家に会ったのです。そんなことをしているうちに、八路軍は日本が言うように土匪の輩や烏合の衆ではないことがわかったんです。日本の思想で頭がいっぱいだった私は、次第に中国共

産党の考え方が正しいと考えるようになりまして。

やっと勉強をし始めるようになり、オブライエンの『社会科学概論』を読んだりしましたが、私に一番勉強になったのは日本語の本です。日本軍の捕虜が持っていた『新語事典』というのがあったんです。その本はマルクス、エンゲルスの説明からレーニン主義の項目もあって、わかりやすく肯定的に書いています。また2・26事件は皇国史観的に書いています。またおそらくこの事典の筆者には右の人左の人もいたんだろうと思います。その事典で多くのことを学んでから、中国語の本も読むようになり、毛沢東の『持久戦を論ず』を読みました。本当に毛沢東はえらいひとだなあと思いました。

●朝鮮独立同盟晋察予辺分会

一九四二年になると私も革命家のようになっていました。日本の捕虜で抗日戦争に参加するようになった人と、日本軍兵士に宣伝活動をしに行くのです。コウリヤン畑などは八路軍の天下です。何かあってもコウリヤン畑に逃げ込めば日本軍は動けないのです。それにとどきは銃を的確に撃ってくるから、怖くて入つてこれられないのです。夜などは日本語のパンフレット、ピラ、ときにはわれわれがつくったカルタなどを入れた慰問袋を置いてくるのです。ときには、西瓜に「日本の兵隊さんへ」と彫つてよく見えるところに置いてくるんです。

また、夜にわれわれは三人で組を作って、離れた三カ所に穴をほってそこから、「遠きものは耳に聞け、やあやあ、われこそは覚醒連盟の……」となのってから、いろいろ宣伝するんです。そしたら中から「おまえら売国奴めが……」などと言ってくるんです。そしたら、「なにをいうか売国奴はおまえたちだ、だまされているぞ、銃をすててこっちへこい」などやるんです。そうこうしていると銃を撃ってくるんです。当然なかつたけれども方向は正確なんです。もうそれ以上やると危ないんです。そうすると約束通り、別の穴からまた「やあやあ、われこそは……」とやるんです。このようにしていると日本軍は、朝になると出てきますが、夜の間は出てこれないんです。夜明け前に、「さよなら」とかいつて部隊に戻るんです。翌日には、その地域の農民に西瓜を食べているどうか、慰問袋を持っていたかどうか等を調べさせて、また次の方法を考えるのです。これを政治攻勢といいます。今千葉県にいる水野という人は日中友好協会の仕事をしていて、以前中国にもきました。その人はわたしたちと一緒にやったひとです。

一九四二年のころに私たちは、朝鮮独立同盟晋察予辺分会（分盟）を作りました。たった二人で始めたんですが、日本軍にいる朝鮮人を八路軍に入れるための工作です。普通、分盟は三名以上でないと作れないのですが、二人で三名

以上のようなふりをして宣伝活動をしました。私は、「創氏改名」はしていなくて、日本の名前はなかったんです。ところが八路軍では、石川郁夫という名前でパンフレットをかいたり、「やあやあ、われこそは……」というとき、「石川郁夫なるぞ」とやったこともあります。

●太行山、延安の根拠地へ

一九四三年になると情勢が変りました。日本軍の捕虜もどんどん増えてくるようになります。八路軍では一切の大部隊行動を停止しました。そして大隊をなくしてすべて中隊編成とし、有力な幹部を中心として中隊別に活動するようになります。大隊として行動すれば日本軍にやられるという判断です。小部隊活動をするようになったので、大きな機関も必要なくなるのです。以前やっていたような直接的な宣伝活動もやらなくなりました。直接的な宣伝活動をするためには背後で大きな部隊が必要だったからです。それで私たちの司令部でも過去のような活動はできませんでした。ちょうどそのとき太行山で独立同盟の幹部たちがいったん勉強を終えて、こんどは各地の分盟に散らばって工作をするようになったのです。それで武亭同志が、陳漢中（チンカンチュウ）という幹部をわれわれの山東支部におくってきました。どういう状況か調べにきたんです。そのときちょうど日本軍から朝鮮人二人が降参してやってきたんです。その二人のうち中学校を卒業した人には、もう一度日本軍にかえってそ

こから朝鮮人を連れてこいという任務を与えました。そしてもう一人の小学校を卒業した人と私を太行山での学習に参加させることにしたんです。

われわれ二人は、便衣という中国人の農民が着る服を着て、山東の根拠地から歩いて平漢線という日本が敷いた鉄道を越えて、太行山に入りました。この移動も共産党の地下の組織が手配をしてくれるのです。太行山では武亭同志が学校の校長をしていました。われわれが行ったところは朝鮮青年革命学校です。そこでは、朝鮮人が三一病院も開いていたし、三一商店というのもありました。床屋などもありましたが、朝鮮人の開いているもののなかで三一病院がとてめ評判でした。当時、朝鮮人が地下工作をして帰ってくるときは、薬を持って帰ってきていたのです。他の病院にはない、そのような薬で治療するので、朝鮮人の病院ではよく病気が治ると評判になったのです。当時、薬が大変不足していましたから、特に薬がよくきいたんです。わたしは太行山で学生隊に入って学生の身分でその隊長をしました。指導者の方で私をこのように抜擢（はくわく）してくれるというので、私もがんばりました。半年ばかり、農業にも参加し炭を焼いたりもしました。中国共産党の政策に、理論だけ勉強したのではない、実際に農業をし、炭を焼くような生き方を実践しなければいけない、という方針があつてそうさせるのです。そ

してその翌年一月、その総括を行なって、この学校がすべて延安に行くことになりました。なぜかという、日本帝国主義が降伏する日が間近に迫っている、朝鮮人はこれから朝鮮へ帰って建国の準備をしなくてはいけない、そのためにはみんなが一つの革命の目的に思想を集中しなければならぬ、いま聞くとこころによれば朝鮮人の中には派閥があつてお互いに意見の相違があるがそれではいけないのでみんな延安に來い、ということになったんです。そして、今後われわれの方針はどうすればいいか、そして現在存在している問題は何か、どういうふうに克服していかなければならないか、こういうことを討議して意見が一致したときに、第三次朝鮮独立同盟大会を開くことになったのです。それで、われわれは延安にいきましたし、それぞれの根拠地にいた朝鮮人も行きました。新しく日本軍からはいつてくる朝鮮人もほとんど延安に送るようになりました。しかし、太平洋戦争も断末魔^{だんま}の状況であり、武亭同志らの活動が順調にいつていたこともあり、また、朝鮮人学徒兵として日本軍に動員された人たちの不満も高まっていたこともあり、延安にすべて送ることができないほど朝鮮人の数がふえてきたんです。そこで太行山で学校を開いたらいいだろうということになって、また、太行山に軍政学校分校ができたりにしています。

●野坂参三の講演

われわれは延安で、約一年間準備作業をして、一九四五年二月、正式に開校しました。そして五月に中国共産党第七次大会がありました、その大会に朝鮮人としては、朴一禹^{パクイル}は正式代表であり、日本人では野坂参三が発表しました。その野坂さんが我々の学校に來て時事問題の講演をしたことがあります。ちょうどアメリカ軍がフィリピンを占領したときです。彼はいまの情勢から見ても日本が降参するまでに半年はかかるだろう、といいました。ところが、野坂さんが帰って一週間もしたらソ連が宣戦布告しました。そして三日目に日本が降参したんです。そして『解放日報』に派遣されていた朝鮮人が、夕食のときに、日本が負けた、日本が負けた、と騒ぎながら入ってきたんです。当時、一日に油を一糧^{リョウ}（一斤の一〇分の一、60^{リョウ}）だけ灯りのために使っていたんですが、それをいっぺんに使っていたいまつをつくってねり歩いたんです。普段は一糧の油は、寝る前の蒲団をひくときだけに使っていたものなんです。

そのとき一番喜んだのは、私らの世代の革命家よりも古参の革命家が嬉しがっていました。私はそう嬉しくなかったんです。私はまだ共産党に入っていないのに朝鮮にいつてどうなるのかなというところが心配だったんです。しかし古参の革命家たちは、ああこれで朝鮮に帰れると無精に喜んでいるんです。それから、みんなでいまつをもって自分たちが建てた、この学生

センターのホールぐらゐの大きさの講堂に集まったんです。そこで「行進曲」を歌ったりしましたが、あんなに声を張り上げてみんなで歌ったのは初めてです。それにおかずのキュウリのつけものを全部食べろ、と出してくるんです。いつもは、食糧が不足してて少しずつ食べていましたからいまつを御馳走だったんです。それからまた、いまつをもって村を一周しました。学校にも行ったら校長先生が言われたんです。「日本に勝ったんだから、これまで日本の問題をいろいろと考えている人はその重荷を捨てなさい。彼は日本のスパイじゃないかとか、通訳をしておったからどうのこうのと頭を悩ましていた人は、その重荷をおろしなさい。今、学校では朝鮮へ帰ることを準備しているのだから、あなたがたは今日は帰って休んで下さい。」

●日本軍の武装解除に

それから二、三日して朱徳さんの命令がきました。朝鮮義勇軍は武亭さんを司令官にして、これからすぐ「満州」へ行き、その東北軍と手をつないで、まだ降参しない日本軍を降参させて武装解除させて朝鮮に行くんだ、という命令です。それでわれわれはすぐに出発するのかと思つていたので、いろんな準備があつて一カ月近く時間がかかりました。当時、中国共産党もソ連が出兵するのを知らなかったようで、出兵後に初めて分ったんですが、スターリンはそんなことをよくやったようです。私の記憶では

九月七日に出発したのですが、その頃は私たちが植えたトマトが実によく実っていました。もう出発するといふのでそのトマトをたくさん食べました。お菓子を売っているようなときではありませんから、ほんとうに御馳走でした。

毎日毎日、中国人の部隊が出発して、私たちは最後の方で、日本の抗日学校の人は私たちの一日後でした。歩いて歩いて張家口まできて、そこで太行山から来た義勇軍部隊と合流、そこから汽車にのり二時間ほど行ったら、日本軍がまだ降参していない、国民党の軍隊がいるとかでまた歩きました。そして古北口というところから万里の長城を越えたのです。そのときソ連軍がそこを守っていて、当時、武装して万里の長城を越えてはいけないうことになっていたんですが、ソ連軍は、知らない顔をして、いけいけ、という感じでした。そこでわれわれは、延安から来たのではない、「満州」の田舎でバルチザン活動をしていたのがいま都会に出てきた部隊であるという風につくろいました。延安から来たことを示す一切のものは軍で保管するというところで、すべて没収されました。私は、危険を犯して本をたくさん背負ってきたのですが、みんなとられてしまいました。ただモスクワ版だけが許されました。

錦州まで来てまた汽車に乗ることができ、瀋陽に着きました。その晩、朝鮮人の農家に入りました。その農家ではわれわれを招待するとい

われて分宿することになりました。電燈の下で白いご飯を食べたことがなにより印象的でした。その翌日から、義勇軍の特長を発揮して農家の庭を掃除したり、農作業を手伝ったりしました。そうすると農民たちは、こんな軍隊は初めてだととても喜んで、その晩マッコリ（濁り酒）をおごってくれました。わたしはあまりお酒を飲めないのにマッコリを飲んで本当に大変でした。二、三日でそこを発とうとしたら農民たちが、あなたたちのご飯は私たちが面倒みますからもう少しいてください、というんです。あなたがたが行けば、私たちはまた匪賊にやられてしまう、米なんかみんなとられてしまいます、と心配するんです。

●東北解放戦争へ

私たちは、後から八路軍が来ますがその軍隊はそんな軍隊ではない安心しなさい、といって出発しました。瀋陽の郊外まで来ると、附近にいた朝鮮義勇軍が全部集まってきました。千名を越すくらいでした。そのときは、新しく加わった人もかなりいたし、北朝鮮に帰ってから追いつき出されてきた人もみんな集まったんです。そこで武亭さんが演壇に登って演説をしました。

みなさんは、朝鮮にいかうと思つてここまで来たんだが、いま形勢が変つて行けないことになりました、というんです。詳しい説明はありませんでした。義勇軍のうち古参の著名な革命家は朝鮮に行きました。金科奉、崔昌益、許貞淑

というような人です。それ以外の義勇軍は、みな「満州」に残つて朝鮮同胞を義勇軍に組織するために居残るというんです。

私は、朝鮮生まれで十八才で出てきて、捕虜になつたりしましたが、将来朝鮮に帰ったら父母を探したいと思つて、帰る日を待っていたのに帰れないというんです。しかたがないので、私は要求して一番北の北満に生きたいといつて、朱徳海という人と十五名でハルビンに行きました。他の人々は南満あるいはいまの延辺である東満に行きました。東満にいったのは、一部は延安の幹部も行きましたが、ほとんど太行山にいた人々で革命に参加した期間が比較的短い人です。そこで武亭さんが、一支隊長は誰、二支隊長は誰、政治委員は誰と発表しました。

当時、国民党がソ連と国際的に約束して瀋陽、長春、ハルビンを正式に受けるということになっていました。われわれ八路軍は出ていけと言うわけです。仕方なしに都会を離れて農村に行きました。それから国民党が、アメリカの援助を受けてどんどんどんどん武装してやつてきました。その後、一九四六年の春、ソ連の部隊が「満州」から撤退します。撤退すると間髪をいれずにハルビン攻撃に入りました。すると国民党はすぐに逃げ出して、われわれ第三支隊はハルビンを解放しました。

第一支隊は吉林省の通化まで行つて、その通化で日本軍の残りが国民党と結託して大暴動を

起こして虐殺をするという情報が朝鮮義勇軍第一支隊に入ったのです。それで、私たちは出勤しました。

●北朝鮮の幹部不足

第五支隊は吉林まで来たとき自主的に参加してきた朝鮮人兵士がいたので、一部の幹部を配置して第七支隊を作りました。第五支隊の次は第六支隊でいいのですが、当時の朝鮮義勇軍には少し別の考えがあったのです。最初に一、三、五の支隊を作りましたが、二、四支隊はなかったのです。それは第一支隊は第二支隊を、第三支隊は第四支隊を新たに組織して作ろうということだったのです。そういう考えで、吉林でも第六支隊ではなく第七支隊を作ったのです。将来、八支隊まで作るという考えもあったのです。

そうこうしているうちに、北朝鮮で建設のための幹部が不足しているので、朝鮮義勇軍のなかで北朝鮮の建設を援助できる幹部は全部朝鮮こい、ということになったんです。それで第五支隊というのは朴一禹^{パク・イルウ}が政治委員でしたが、大隊長以上の幹部をすべて連れて北朝鮮に行きました。前に武亭さんから古参の幹部は飛行機で平壤に行っていました、第五支隊ではこんどは幹部たちがみな行ってしまったのです。残るその部隊は中国の部隊に入っていました。現在、李紅光^{イ・ホンクワン}支隊と言われることもある第一支隊の本も、第三支隊の本も出ているけれど、第五支隊はこのように二、三カ月で中国人の部隊に

入ってしまったので、本もでていません。

わたしは第三支隊で活動しました。日本軍とも闘った歴史を持っている力のある匪賊が北満にいましたが、その匪賊が国民党と手を結んで中国共産党に激烈に反対していました。その匪賊と闘いました。その後、情勢が良くなつてからハルビンに入り、一時、衛成^{エイセイ}工作をやり、その後、佳木斯^{ナムス}へ行きました。また、ソ連から武器をもらって綏芬河^{スイフンカ}というところでハルビンを越えて南満の国民党との戦争のために武器を送る輸送事業をしたりしました。わたしはあのと一、二個大隊をつれて佳木斯に行き、その武器庫の警備にあたりました。

ハルビンあたりで匪賊が日本人の部落を襲うというので、護衛に出かけたこともあります。それは、開拓団の部落で、以前は家が散らばってありましたが、その頃には固まってありました。夜には日本人が持っているものが奪われました。りしていました。われわれの部隊がそこに行きました。当時二五才の部隊長の私は、日本人から見れば、若い部隊長でした。日本の開拓団の人を集めて、われわれはあなたがたを保護しに来ました、安心して下さい、と話して、そのあと、日本人の生活している部屋を回ってみました。病人もいてその病人を慰めたりして本部のようところに帰ってきました。すると日本人のおじさんが三名やってきました。彼らは、日本人の女性三名を代表として差し出し

ますから他の女性に何もしないでください、というのです。われわれの考えも及ばなかったことをいうのです。われわれは、絶対そういう部隊ではありませんから安心して下さいといつてその三人をかえしてたというようなこともありましたが、結局そこに半月ほどいました。

そこを離れるとき、女性たちが義勇軍に参加するといつて聞かないんです。わたしは司令部に問い合せましたら、それでは連れてきなさいというので一緒に行きました。部隊の夜会では、その日本の彼女らが立派に歌を歌ったりしてくれました。その後、衛生隊に配置されることになってわれわれと離れました。当時、髪の毛がよく抜ける発疹チフスがはやりましたが、その中でよく働いたようです。その後、四六年ごろ、日本人が引き揚げるとき彼女らと一緒に日本に帰って行きました。

●中国共産党の整風運動

東北解放戦争で次々に勝利を得て最後の段階に入った一九四八年の春、長春の近くで訓練をしました。家の中に集まってただ静かに考えるんです。過去をどうして生きてきたか、どんなに苦しい生活をしたか、自分の父は母はどうして死んだか、なぜ死ぬときに薬も使えなかったのかなどなど、いろんな昔のことを考えるんです。食事の時間になつても誰も笛を吹かないで、食べた人は食べるという具合です。毎日毎日自分の父のこと母のことを考えて泣いている人

もいるし、壁に体をぶつけたりする人もいます。
です。

それが一段落したら、みな集まって自分の考えたことを披露するんです。自分は地主のところまで働いていてこのような苦勞をしましたとかいうんです。それを聞いた人が、自分の母は地主に殴られて死にました、とかいう話もでくるんです。みんなが話すようになるし、お互いに同情するようになるんです。そうしたら、その人も名前を書きなさいということになって、祭壇を作ってそこに大きな字で不幸に死んだ何人かの名前を書いてみないで追悼式をあげるんです。そこで一番苦勞した人が演説を始めると、みな泣きだすんです。このようにして父母を苦勞させた地主あるいは国民党軍閥にたいする闘争心を結集させていくんです。党の整風運動の方法のひとつです。

まだ国民党の支配していた長春は、日本統治時代のトーチカなどがとても立派でそのまま残っていました。大砲のないわれわれは、六カ月間そこを包囲して兵糧攻めにするという方法によって、その年の一〇月、ようやく国民党の手から長春を解放することができました。われわれ第三支隊は長春に入り、治安維持のための任務につきました。

一九四九年八月には、朝鮮でこの部隊が必要だというから、部隊全体が朝鮮に行きました。図們を越えて羅南の方に入りました。瀋陽にい

た第一支隊は安東を越えて新義州から朝鮮に入りました。そのときの私のことですが、経済建設の必要からここに残すというんです。たしかに当時、東北解放戦争が終わった頃、中国全体を解放するために東北地方の経済建設というのは重要な任務でした。しかし、なぜ一番国に帰りがたっている私を残すのかと思いましたが、どうも私の日本の軍隊にいて通訳をしていたという経歴が問題になったようです。しかたがありませんでした。わたしは、豆満江^{トウマンガン}越しに朝鮮が見える開山屯のバルブ工場で働くことになりました。その工場は「満州国」時代のカネボウの工場だったものです。朝出勤して事務所の机に座ると朝鮮の列車が煙をはいて走るのが見えるんです。とても辛い状態でした。

●反右派闘争、文化大革命の中で

延辺朝鮮族自治州でのその後の私の生活にも、言葉で言い表せないような曲折がありました。

私はある時期、工場でソ連の「唯一管理制度」を一生懸命にやりそれなりの成果を収めました。それが小平さんが東北地方に来て、唯一管理制度は白旗だ、反革命だというんです。今考えれば唯一管理制度もたいした考え方ではなくて問題が多いのですが、私が頑張ったことは、反革命だということになったのです。

たま、一九五六年には毛沢東が反右派闘争をすると言ったんですが、そのときは、私は民族主義者としてデッチ上げられるようになります。

延辺朝鮮族自治州の幹部は朝鮮人がやるべきだ、朝鮮人の幹部を抜擢しなければならない、ということをお話は話していたんですが、それが問題となって「地方民族分子」となったんです。わたしは、そうではない、わたしは共産主義者だと弁論しました。最後には、私を民族主義者だというのならあなたたちは「大漢族主義者」と反駁したりもしました。でも問題があるとして四年半、労働に従事させられました。四年半たったとき、これは柳東浩の立場の問題ではない、認識不足であつたので、その認識を改めたのだから問題がないということになって元の所に戻ったのです。

帰って暫くしたら、今度は「四清運動」が始まりました。それに巻き込まれていたら、おのらく今の私はなくなっていたでしょうが、それが徹底する前に文化大革命が始まったのです。いまの幹部たちは問題がある、彼らをやつつけないては本当の共産党はできない、という具合です。私は、元氣になって運動に参加したのですが、最後の段階で「階級整理」というのが始つて、おまえは日本軍の通訳をしていた、老革命家ではない老反革命だ、とやられました。十一カ月ほど監獄みたいなところに収容されたりしましたが、まあ生き延びたのが不思議なくらいです。

(一応、了、文責・むくげの会／担当・佐久間、飛田、水野直樹氏の協力をいただきました。)